

氏名(国籍)	李 ^い 玄 ^{ひよん} 玉 ^{おく} (韓国)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	博乙第1,258号
学位授与年月日	平成9年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	心身障害学研究所
学位論文題目	自閉症児における伝達機能に関する行動論的アプローチ
主査	筑波大学教授 教育学博士 小林重雄
副査	筑波大学助教授 篠原吉徳
副査	筑波大学助教授 教育学博士 杉山雅彦
副査	筑波大学助教授 茂呂雄二

論文の内容の要旨

1. 本論文の構成

本論文は、第Ⅳ部10章で構成されている。

2. 本論文の研究目的

本論文は、自閉症児におけるコミュニケーション機能の問題点を明らかにするために、健常幼児と自閉症児の発話の実用機能および相互作用の伝達機能に関する分析を行った。そして、自閉症児において、それらの伝達機能をより効果的に指導していくための方法を検討し、相互作用の伝達機能に重篤な障害をもつ自閉症児における言語指導プログラムの形成を試みた。そのために、本研究では、自閉症児に対して、文脈に適合したイントネーションと適切な終助詞の使用の訓練を行った。それによって、希薄だった伝達意志を増大することができるようになり、会話がなめらかになること、さらには、聞き手に伝達意図を了解してもらえる場合が多くなり、会話活動が活発化する可能性があることについて検討した。

3. 研究の方法と結果ならびに考察

第Ⅰ部 自閉症児の言語発達に関する研究動向と本研究の目的

第1章 自閉症の概念と診断

ここでは、まず、自閉症の概念として、精神分裂病との分離、発達障害としての概念について説明した。次いで、診断基準の変遷、自閉症の診断・評価および治療教育においてかかる方向性について述べた。

第2章 自閉症児に関する研究動向の概説

ここでは、最近の研究動向を中心に、自閉症の症状論、原因論、治療論について概観した。

第3章 自閉症児における言語の発達及び指導に関する研究動向

ここでは、まず、自閉症児の言語発達に関する研究動向について概観し、次いで、自閉症児における言語指導法、自閉症児の言語指導における語用論的アプローチについて説明した。

第4章 自閉症児におけるコミュニケーション障害

ここでは、コミュニケーションとしての言語発達、自閉症児における言語発達と規定要因、自閉症児の言語発達における相互作用の伝達機能について述べた。

第5章 本研究の目的

第Ⅱ部 自閉症児における言語行動の機能的分析

第6章 自閉症児におけるコミュニケーション機能に関する分析

まず、研究1では、1語発話期にある健常幼児と精神遅滞を伴う言語発達遅滞児におけるコミュニケーション機能の特徴を検討した。

次いで、研究2では、1語発話期にある自閉症児のコミュニケーション機能を分析し、自閉症児の言語発達の特徴とコミュニケーション機能の偏りを明らかにした。

第7章 自閉症児における相互作用伝達機能に関する分析

まず、研究3では、言語発達検査、韓国版「ことばのようす」に語用論的伝達機能の枠組みを導入して、健常乳幼児の伝達行動の発達プロフィールを表示し、その診断的有効性を検討した。その結果、本研究で作成された伝達行動項目のチェックを通じたその発達プロフィール表は、その子どもの言語指導における知見を得ることが可能であり、その診断的有効性が示唆された。次いで、研究4では、精神遅滞児と自閉症児における各伝達機能の特徴を健常児との比較を通して明らかにした。それを基づいて、研究5では、自閉症児における相互作用伝達機能に関する分析を行った。その結果、自閉症児においては環境的結果事象を導く伝達機能はよく発達するが、社会的結果事象を導く伝達機能には遅れがあるという特徴が明らかとなった。

第Ⅲ部 自閉症児における相互作用伝達機能の獲得に関する言語指導

第8章 自閉症児の相互作用伝達機能において伝達的ニュアンスを加える言語表現に関する検討

まず、研究6では、相互作用伝達機能と情報要求が可能であり、言語発達の比較的良好な自閉症児と健常幼児との言語表現において伝達的ニュアンスを加えるイントネーションの使用について検討し、自閉症児におけるイントネーションの特徴を分析した。その結果、自閉症児は手持ちの言語に適切なイントネーションを用いることができず、非交流的で機械的である自閉症児独特の無表情で単調な話し方をしていることが明らかとなった。また、イントネーションの使用においても、健常児とはかなり違っている特徴が示唆された。

次いで、研究7では、健常幼児及び精神遅滞児、自閉症児とを比較して、相互作用伝達機能と情報要求における終助詞の使用に関する自閉症児の言語表現の特徴を明らかにした。つまり、自閉症児は相互作用伝達機能や情報要求の伝達機能を獲得していても、終助詞「よ」、「ね」を伴う文をほとんど表出していないことが明らかとなった。

第9章 自閉症児における伝達的ニュアンスを加える言語指導プログラムの適用とその臨床効果

まず、研究8では、研究6の結果から認められた自閉症児の不適切なイントネーションの改善のために、劇の台詞練習を行うことによって、イントネーションの獲得することができ、日常会話における伝達的ニュアンスを加える言語表現への応用可能性について検討した。また、研究9では、自閉症児にイントネーションおよび終助詞「よ」、「ね」を伴う伝達文を習得させるために、絵画や写真の特定の文脈を弁別刺激として用い、合わせて模倣と強化の手続きを用いる言語指導法が有効であるかどうかを検討した結果、その指導方法が有効であることが確認された。

第Ⅳ部 総合考察

第10章 自閉症児の相互作用伝達機能に関する行動論的考察

ここでは、まず、本研究の全体的な要約と、本研究の成果に基づいて、相互作用伝達機能に障害をもつ自閉症児における新しい言語指導プログラムを提案した。そして、今後の展望として、自閉症児の実用言語への指導、行動論的言語訓練における新たな方向性について述べた。

審査の結果の要旨

自閉症児のコミュニケーション障害は深刻な問題であり、この問題への取り組みは必須の課題として取り扱われてきた。自閉症児においては、ことばの発達遅滞ばかりでなく、意味論的、語用論的能力に重篤な障害をもつ

といわれている。

そこで彼らについてのコミュニケーション行動のアセスメントの中に、伝達機能や会話能力についての評価を含めるため「ことばのようす」検査（小林・前川）を改訂し、韓国版の検査を標準化したことが評価できる。

また、その検査を用いた検討から話しことばにおける適切なイントネーションと終助詞の使用について言語行動レベルでの練習を行い、相互作用的伝達機能の改善に効果のみられることを示した。そして、その試みを基礎に新しい行動論的言語指導プログラムを提案したことは特筆できる。

論文構成としては研究課題の設定までが冗長であること。相互伝達機能の改善へのアプローチとして non-verbal な側面から追求されていないことなど問題は残るといえよう。

よって著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。